

善與惡之渾沌世界

——芥川龍之介《羅生門》之閱讀指導——

黃 錦 容

東吳大學日本語文學系副教授

中文摘要

在日本語教育場域中「文學課程」之可能性如何定位？外國人學習者之日本文學「閱讀」在與語言教學之關連上應如何區隔？對僵化、制式的主題掌握應如何藉著教師的指導克服學生多樣化的主觀「閱讀」？本論文以芥川龍之介《羅生門》為例，就日文系專攻日文的四年級學生為對象，以「理解人性」與「異質文化理解」為主要學習目標擬定以下三種內涵的學習模式。

- (1)理解人性——藉由「自我」與「他者」的不同解讀方法，帶入主題。
- (2)跨文化學習模式建立之可能性——包括「關鍵詞」之解釋；主觀性「閱讀」之克服；與中譯版語彙掌握之異同比較。
- (3)語言學習與文學欣賞之結合——藉「關鍵詞」解釋能力達到掌握語言背後的感性力量，培養文學欣賞之能力。

指導方法與過程如下：

- (1)培養問題意識——提示研究史具代表性評論中不同的複數觀點，導入作品與作家之關連性。
- (2)針對主題展開深化理解人性之「閱讀」，以「自我」「他者」之相對化架構探討出場人物之言談舉止。誰？做了什麼事？在什麼地方？掌

握其性格與故事大綱。

- (3)由描寫部分提示、說明、分析「關鍵詞」之意涵。並具體共同討論為何該字句或段落為「關鍵詞」之理由。
- (4)問題之提示——確定主題之掌握是否妥當？以交報告方式，針對多樣化的「閱讀」克服其主觀性。
- (5)提示「終結部分」之問題性，檢討作家的背後意圖與描寫能力，並擴大發展作家整體文學世界之初步認識。
- (6)以中譯版與原文相互對照，就語言層面檢討「關鍵詞」與重要段落之中譯文字表現不足處，思考感動程度之差異性與異質文化理解之問題是否存在，而完成本作品之閱讀指導。

關鍵詞：芥川龍之介、《羅生門》、傭人、老太婆、黃昏、蟋蟀、烏鴉、面炮、勇氣、惡、自我、他者

善と悪の混沌した世界

—— 芥川竜之介『羅生門』の読みの指導 ——

黄 錦 容

東呉大学日本語文学系副教授

要 旨

日本語教育の場における「文学課程」の可能性がどこで位置付けられるのか、文学の「読み」と言語教育との両者においてどう区別されるのか、定着化された主題の把握に対し教師は学習者の主観的「読み」をどう克服すべきか。本論文は芥川竜之介の《羅生門》を例にし、日文系の専攻四年生を対象にし、「人間性の理解」と「異質文化の理解」とを主な学習目標とし、以下は学習指導の方法を試みたものである。

- (1) 人間性の理解——「自己」と「他者」の解読方法の違いで、主題を導入する。
- (2) マルチカルチャー的な学習方式の成立の可能性——「キーワード」の解釈、主観的な「読み」の克服、そして中国語訳された語彙の把握の比較。
- (3) 言語学習と文学鑑賞との結び——「キーワード」の解釈能力で、言語にある感性の力を把握し、文学鑑賞の能力を養う。

指導方法とその過程は次の通り：

- (1) 問題意識を養う——研究史にある代表的な評論の観点のいくつか

を提示し、作品と作家の関連性を導入する。

- (2) 主題について人間性を深く理解する「読み」を展開し、「自己」と「他者」の相対性において出場人物の言動を検討する。誰が、何を、どこでという方法で主人公の性格と物語の筋を把握する。
- (3) 描写の部分で「キーワード」の意味合いを提示し、説明し、分析する。そしてどうしてその字や段落が「キーワード」となる理由を全員で具体的に討論する。
- (4) 問題提示——主題の把握が妥当であるかどうかを確認する。多様な「読み」については、レポートを出すという方法で、その主観性を克服する。
- (5) 結びの問題性について、注目を促し、作家の意図と描写能力を検討し、そして作家全体の文学世界への初步認識まで拡大する。
- (6) 中国語に訳された作品を用い、原作と対照させる。言語の面において本文の表現に即し、重要な段落にある「キーワード」と中国語訳された作品に不足な表現とを比較し討論する。さらに感動の程度の差異性・異文化理解という問題意識を喚起し、最後に本作品の読解指導を完成するのである。

キーワード：芥川竜之介、『羅生門』、下人、老婆、蟋蟀、鴉、面炮、勇氣、
悪、自我、他者

The Chaotic World Between Good and Evil

— Reading Guide to “RASHOUMON” by RYUNOSUKE AKUTAGAWA —

Huang, Chin-Jung

Associate Prof. of Department of Japanese Language and Culture

Soochow University

Abstract

How to define the possibility of 「Literature Program」 in the domain of Japanese language education? How to differentiate the correlation between Japanese literature's 「reading」 of overseas learners and language teaching? How to overcome students' varied and subjective 「reading」 through the instruction of teachers with regard to the grasp of rigid and conventional subjects? Taking RYUNOSUKE AKUTAGAWA <RASHOUMON> for example, based on 「Comprehension of Human Nature」 and 「Comprehension of Heterogeneous Culture」, we draw up the following three learning modes which is mainly aimed at the seniors of Department of Japanese Literature.

- 1) Comprehension of Human Nature-to come to the point via the diverse understanding of 「self」 and 「others」 .
- 2) The possibility of cross-cultural leaning modes' establishment-explanation of 「key words」 ; overcoming of subjective 「reading」 ; vocabulary comparison with Chinese translation version.

- 3) The integration of language learning and literary appreciation-to grasp the perceptual strength behind the language so as to foster the ability in literary appreciation through explanatory ability in 「key words」 .

Mentoring and process are addressed hereunder:

- 1) To cultivate the consciousness of questions-to point out the diverse pluralities of representative commentaries in the research history.
- 2) To develop the profound comprehension of human nature's 「reading」 in the light of varied subjects and to probe into the words and deeds of characters on the basis of comparison between 「self」 and 「others」 . Who? What did s/he do? Where? To grasp the characters and outlines of stories.
- 3) To point out explain and analyze the meaning of 「key words」 through descriptions and to concretely study the reasons why this word, sentence or paragraph is to be the 「key words」 .
- 4) Clue of questions-to ensure whether the subject is appropriate? To overcome the subjectivity towards diversified 「reading」 by means of handing in reports.
- 5) To point out the question of 「ending parts」 , to review the implications and descriptive ability of the author and to develop the preliminary understanding of the author's overall literary world.
- 6) Compare the Chinese and the original versions, to review 「key words」 as well as the shortcomings of essential paragraphs of the Chinese version in the aspect of languages, and to study whether the difference in sensibility and the issue in heterogeneous cultures are existent; further to fulfill the reading instruction of this works.

Key words: RYUNOSUKE AKUTAGAWA, 《RASHOUMON》 , servant, crone,

dusk, cricket, crow, acne, courage, evil, self, other

善と悪の混沌した世界

— 芥川竜之介『羅生門』の読みの指導 —

黄 錦 容

東呉大学日本語文学系助教授

1. 始めに——人間認識を目指す学習構造

まず、これから問題にすることは、日本語教育の場において、文学作品の読み方の方法と原則を明らかにしたいということである。それは学習の目標と効用から考え、実用的な言語能力の育成を主とする「言語教育」（読解教育を含めるもの）と、普遍的な人間理解を目指そうとする「文学教育」との区別の問題でもある。

文学教育がある意味で、読み方指導にも関わっているものである。ただ、いかにその両者を有機的なつながりを持たせるべきか、という位置付けの問題である。日本語を教えるということは、日本語の発音・文字・単語・語彙・文法など、日本語の体系的な知識を教えていく教育である。そこには日本人の立場から言う「国語教育」とはある意味でかなり重なる部分もあるから、ここで、まず日本の国語教育の内容と構造から踏まえておきたい。第二次世界大戦以前は日本人で言う国語教育の目標は＜子供をすぐれた日本語の担い手とする＞ことがその基本的な要件となっていた¹。そこで、目指された「すぐれた日本語」というのは単に「標準語で文字・発

1. このような国語教育の目標は 1956 年に日本教育科学研究会・国語部会が承認したテーゼである。

音・単語・文法などについての系統的な知識を与えて、日本語に対する正しい理解を与えるもの」とは限らない。ひいては、「言葉を形式とする芸術・文学作品を正しく鑑賞する力を養い、その創造のための基礎をつちかう」し、「祖国のことばの力を自覚させ、また祖国のことばに対する愛情をやしない、正しい民族意識を育てる」ことにある²。しかし、「文学教育」はもし作品の読み方だけを扱っていると、所詮文学作品の登場人物を通して日本人の歴史・生活を形象的な認識を通して理解することもできないだろう。なぜかという、そこには必然的に文学理論・文学史・作家論・作品論を含み込まれてしまうからである。「文学教育」を「読解教育」と区別されなければならぬのは以上の理由によるものである。なお、文学教育が同時に普遍的な人間理解を目指そうとしているものである。「文学作品の中に偉大な作家の、正確な現実認識がもりこまれ、人間や社会についての深い思想が語られている。読み手はそれを自分のレベルに引き下げてはならない。丁寧に繰り返してよまねばならない。そのことによって読み手は沢山のものを学ぶことができるはずである。更に自分のもつ限定をこえ、気高い作家の精神にふれ、次第に人類に近づいていくのである。これこそ人間の成長というものである。」³

そういう意味で把握された外国人の学習者による文学作品の「読み」は、その第一義を最初から自国と日本、という内外の差異を無視した上で、普遍的な人間認識へ求めていかなければならないものであろう。次は、学習者の雑多な見解における読みの主観性をどう捉え、どう評価し、どう方向付けるかという実践的な指導の具体化を考えてみよう。勿論参考文献の研究史のいくつかの説を提示し、一元的な結論へ導いていき、頷かせるのが最も手っ取り早い早道であろう。だが、単に定説の客観的な「読み」を押し込ませて、無闇に学習者に不要な偏見を与えて、主観的な

2. 宮崎典男『文学作品の読み方指導』、むぎ書房、1980。

3. 注2に同じ。

読みを妨げてしまうのである。教師の一方的な詰め込み式の指導法は結果的には、先ず学習者の実感としての作品の面白みと感動性が漠然とそのうちに見失われる危険性も大いに予想される。又、自分と他の学習者、ないしは自分と専門的な評論家の意見との食い違いをどういう読解方法を通して、徐々に自分の納得のいく結論へ纏められていくべきか、その手順の学習もできなくなる。かと言って、指導方法なしの読み方指導は一種の放任主義となり、結果的に学習者が作品の世界に凝縮された社会像のすべてを自分の基準でしか捉えられなくなり、「自我認識」しかできない人間になる。しかも更に危険なことはそこで考えられた「自我」というのは、狭められた自身・自国の生活体験になりがちである。つまり、異文化理解の面で考慮された場合には、「他者」の理解不能の人間どころか、外国文化の接近と「社会認識」も崩壊されていくのである。そこで、筆者が試みた指導方法は、作品の主題把握と「自我」対「他者」という構図で組み込まれた人間認識を目指して、描写部分に現れてくる「キーワード」の提示と吟味を通して、学習者の「主体読み」を求めてみる、という方法を取った。そして、教室活動の中心として、以上の様々な主観的な読みとその結果を、研究史にあるいくつかの定説と合わせて評価し、それを比較対照させ、正しい主題把握と作家認識まで拡大する方向に授業を組み込むのである。

2. 実践的な授業における指導案——キーワードの解釈問題

以下は芥川竜之介の『羅生門』（大正4年9月作、同年「帝国文学」の十月号に発表された作品、作者数え年二十四歳）という作品を例にして、その指導方法と進み方を述べていきたい。この作品は従来芥川竜之介の準処女作と目された作品であり、『鼻』『芋粥』の両作と共に彼のいわゆる「王朝物」の基礎を固めた初期の作品である。出典は『今昔物語』の一節を借りてきたものである。粗筋については、

平安末期の時に、京都の南の玄関口である羅生門という場所で、主人から暇を出された独りの下人は雨宿りをしていた。飢死にするか、盗人になるか、と考えあぐねていたのである。今夜の一夜の埒を求めて、羅生門の楼上を上がっていくと、そこに気味の悪い老婆が屍骸から髪を抜いていたのを発見する。下人は正義感に駆られて老婆をねじ伏せようとするが、老婆が衣食のために、仕方なく生前悪事を働いた死者の髪の毛を抜いて、鬘にしていることを語る。下人はそれを聞いているうちに彼はある勇気が湧き上がり、老婆の着る物を剥いで闇夜に消えていく。一見して分かるように、この作品のテーマは生存のための人間のエゴというものである。止むを得ない人間の必要悪を取り扱うところには、既に早い時期から芥川竜之介の厭世的な人生哲学が現れていたのである。この作品を教材として読む時は、学習者のめいめいの読みの主体性をどう評価し、どう方向づけるか、という実践例を具体化して見ていこう。

2.1 羅生門という場所の象徴的意義——「暮れ方」「蟋蟀」「鴉」

まず題名の「羅生門」という場所の問題性を一つの枠として考えてもらうことにした。方法としては、描写の面のキーワードを取上げ、学習者の多様の解釈と説明を、共同討論を経て、その意味の的確な把握に努める。例えば、冒頭の「暮れ方」の表現効果と提示について、まずその夜に向かう時間的意味をどこまで理解できるのか、を検証する。

＜或日の暮れ方の事である。一人の下人が羅生門の下で雨やみを待つてゐた、広い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所々丹塗の剥げた、大きな丸柱に蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。＞

この書き出しの一文が特に「暮れ方」という夜に向かう時間的な意味、又は「蟋蟀」という動物のイメージは、主人公である下人の心理状態と「羅生門」という不気味の世界と両方の提示にはどんな効果を作り出していると思われのか、自分の感想をも入れて分析してもらった。そして、学生の解答から「荒廃した羅生門の寂寥感を暗示するもの」、「下人の孤独の存在を象徴するもの」、「死の世界における唯一の生の現れ」、「季節感としての寂寥感」、といったような見解が披露されたのである。つまり、この「蟋蟀」の象徴性は他の「鴉」が共に場所柄の「死」の世界を意味する「羅生門」に現れたところ、同じ「寂寥感」を表すものとして理解される。ただ、場所として連想される「羅生門」の問題だけではなく、同時に主人公の下人の途方にくれる孤独の心理状態を提示するものである。問題は下人の孤独の心理の反映が果たしてどういう内実をもって読み取られたか、実にかなり様様な内容解釈を学習者が施しているものである。そういう「蟋蟀」の「孤独」象徴性について、引き続きどのような見方で捉えられているか、答えさせた。そして<城の衰微と貧しさが一通り出はないことが分かる。それも同時に下人の拠り所ない孤独を示している>、<「鴉」に対して「独り」、「個人」を象徴する。独りになれば、自己意志によって何でもできる。自身の利益によって選択を決めて、「団体」に限らない>、<蟋蟀がいる時、下人はまだ生の世界に接触する。しかし、蟋蟀がいないと、下人はもう完全に死の世界にいる>、<「蟋蟀」が、「自然性」を意味しているのに対して、「老婆」は「自由性」を意味する、という対応関係にある。「老婆」によって、下人は世界の「無」化の論理から脱出する方途を示唆され、新しい生へと飛躍していく>という三つの見解があった。これらの見解は明らかに「羅生門」という場所柄から想像された時代の関連性のもの」、「<生>と<死>との両義性から想像される意味のもの」、「<他者>である老婆との対応関係から考えられる人間の<孤独>の意味」という三つの枠の角度に立ち問題を見たものである。

それから、さらに羅生門という場所の性格を限定してみれば、そこには「荒廃す

る京都の姿」・「死の空間」・「既成の価値観の崩壊」、といった三つの性格が付与されているものである。「冒頭の二文で＜暮れ方＞＜雨＞という作中で重要な役割を担う事象（「暮れ方」は時間の推移に伴い「夜」と形を変えていく）が示され、続いて「この男の外には誰もいない」という表現が繰り返されて、下人の孤独が強調される」。そうした下人の孤独はそれぞれ「蟋蟀」と「鴉」の生き物の点描によって、象徴されていく。「下人のこの孤独の在り方は、下人以外の唯一の生命体として登場する一匹の『蟋蟀』に象徴されるような不安な在り方であり、更にそれは下人が失業者であることにより決定的なものとなる」。しかし、原文に出てくる描写には、「当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使はれていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波に外ならない。」と説明されるように、下人が自らの帰属する場を失った原因は、京都の衰微にあるのである。それまで信仰の対象であった仏像や仏具を破壊し薪として売り捌くということは社会の拠所であった価値観の崩壊として捉えることができよう。京都の荒廃は、既成の価値観の崩壊という性格を持っているのである。⁴

更に、この羅生門近傍は、死の空間という性格を備えている。それは「引取り手のない死人を、この門へ持って来て、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出来た」という記事にも明らかだが、「鴉」の描写によってより切実なものとなる。⁵ここの「鴉」と前の「蟋蟀」のイメージは荒れ果てた「羅生門」（場所という問題性）、又は下人の心理（人物・事件という問題性）を象徴的に描くのにどんな効果を果たしていると思われるか。「鴉」のイメージの象徴性の問題に対して、学習者はどんな回答をするのか。

4. 今野哲「『羅生門』論——生を希求するかたち——」『二松』、1991。

5. 海老井英次「『羅生門』——＜自我＞覚醒のドラマ」『芥川竜之介論考——自我覚醒から解体へ——』、1988。

くその代り、鴉が何処からか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が、何羽となく輪を描いて、高いかくし鴟尾のまはりを泣きながら、飛びまわつてゐる。殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうに、はつきり見えた。鴉が、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに来るのである。――尤も今日は、刻限が遅いせゐるか、一羽も見えない。唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段の上に、鴉の糞が、点点と白くこびりついてゐるのが見える。下人が七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頬に出来た、大きな面皰を気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めてゐた。>

これは「蟋蟀」のイメージと同じように、荒れ果てた「羅生門」(場所という問題性)を象徴的な効果を果たしていることはほぼ正しく理解される。一般論として「悪」と連想される「鴉」のイメージは「鴉は暗闇にある邪悪の象徴と感じられる」；羅生門という非日常の世界の生存原理への認識は「カラスは生きるために手段を選ばず卑怯な生き物で、死人の髪を毫り取って生きる老婆と老婆の服を奪う下人と呼応する」；あるいは主人公である下人の自我の問題性には「鴉は「団体」であるから、必ず「集体」で行動するのである。「団体」に限って自由にすることができない。下人の生きていた社会を象徴する」；そして老婆に向ける他者認識には「鴉と腐肉の関係は、老婆と死体の関係と同様なものだ。動物なら、道徳に批判しないのは当然なことだ」と、四つの意味をほぼ学習者全員が読み取れる。ただ、「鴉」と前述の「蟋蟀」の件とは、微妙に下人の心理まで関連され、想起される意味合いが明らかに違ってくるものである。ただ、どこまで、それが理解され得るか、という問題である。以上のような解説からは、一般論の「邪悪と不幸」というイメージから、場所の「羅生門」と、他者の老婆との対応関係まで、学習者には「善」と「悪」の両面性からいよいよ作品の主題に迫っていき、明らかに肯定論・否定論

の二つに分かれた見解を示している。ただ、ここで、一つ示唆的な問題は「善」と「悪」のそれぞれは、どういう意味として、「自我」・「他者」・「時代」と関わっていくか、という学習者の生への認識の問題である。それだけではなく、この問題と同時に喚起される問題は主人公の「自我」がどうやって「他者」・「時代」と対応していくべきか、という次に出てくる下人の「勇氣」の問題へ展開されなければならないことである。しかも、自我の行動の原理となる下人の「勇氣」は、又彼の他者認識・社会認識がどこまで当を得ているかと、主人公の「自我」の実態もますます焦点が当てられるようになり、いよいよ作家芥川竜之介の創作意図まで問われるところまで思索行為が推し進められていくのである。

2.2 主人公の性格及び心理の把握——「面皷」と「勇氣」

次から繰り返されるもう一つのキーワードに留意しよう。それぞれ前後の何箇所にも同じく「面皷」の出てくる場面と合わせて、下人の心理的变化、特に彼の「勇氣」と合わせて考えて、具体的に学習者に主人公の言動の特徴を把握する上で、二つのキーワードの意味を理解させる。

く老婆は、大体こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左手の手でおさえへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皷を気にしながら聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて来た。それは、さつき門の下で、この男には欠けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動かうとする勇氣である。下人は、飢死をするか盗人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時の、この男の心もちから云へば、飢死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に迫ふ出さ

れてみた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな声で念を推した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皷から離して、老婆の襟上をつかみながら、噛みつくやうにかう云った。

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、飢死をする体なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剥ぎとった。>

「面皷」から考察される下人の内的心理・真実の感情の表現はどういうふうに解釈されるべきものだろうか。飢え死にするか、盗人になるか、躊躇していた下人は果たして善悪の選択に直面しているものだろうか。それとも生死に関わる一大事として、下人はそれほど飢死の不安を感じていたのであろうか。学習者の読みを見る前に、まず諸説におけるこの「面皷」の意味解釈について、以下のような六説を踏まえておきたい。

- ① にきびがあることで下人の年の若さ、皮膚のあらさ、その他を想像させる。青年を意味する効果。⁶
- ② 何度も「面皷」の描写を何度も繰り返す意図を小説の進行系の「小道具」とするもの。下人盗人になる「勇気を出ずにゐた」間は「面皷を気にし」、決断を下ろしたところで「手を面皷から離」す。下人の精神状態と密接不可分である。⁷
- ③ 「面皷を気に」するのを、下人の「劣等感」としてみるもの。⁸

6. 吉田精一注『近代文学注釈大系芥川竜之介集』、有精堂、1963。

7. 宇野浩二『芥川竜之介（その十二）』、文学界、1952。

8. 寺村滋「『羅生門』の精神分析的解釈」『滋賀大学 国語国文学』、1956。

④ 「過去の文化や習慣によって植え付けられた自意識」そのもの。⁹

⑤ 下人に「残っている虚栄心、したがって人間らしさ（悪魔的でないもの）」と解く論。¹⁰

⑥ 「面皷を気に」するのを、「下人の臆病な性格を示す」もの。¹¹

この「面皷」は予想の通りに、下人の「若さ」と連想される語彙としてすぐさま読み取れるものであった。しかし、この若さをもって、その背後の象徴的意味を理解されるべきか、明らかに作品の主題である「悪」との関連性及び下人の「飢え」から脅かされている精神状態など、多様化の解釈がいくらかでも可能となるものであろう。ただ、指導方法で留意されるべきことは、むしろ学習者におけるこのキーワードの前後に出てくる「勇気」というキーワードとの有機的機能を促すべきだと思われる。つまり、「面皷」と下人の心理的変化、特に彼の「勇気」との関連性について、本文描写の正しい読解を検証していかなければならないものである。又、以上の引用は下人の「悪」への憎悪心が逆転し、いきなり「悪」の世界への飛び込みが肝心な読解の箇所でもある。ここでは、「赤く頬に膿を持った大きな面皷を気にしながら聞いてゐる」たのを、「之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇気が生まれて来た」。「それは、さつき門の下で、この男には欠けてゐた勇気である」から、「又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇気とは、全然、反対な方向に動かうとする勇気である」。ここで、始めて「下人は、飢死をするか盗人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時の、この男の心もちから云へば、飢死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に迫ふ出されてゐた」のである。この意味の三段階変化を遂げた「勇気」が成立したところで、「不意に右の手を面皷から離して」、「老婆の着物を剥ぎとつた」のである。悪の勇気への

9. 森常治「芥川竜之介の『羅生門』」『解釈と鑑賞』、1965。

10. 川崎寿彦『分析批評入門』、至文堂、1967。

11. 石割透『芥川竜之介』、有精堂、1985。

展開を「右の手を面皷から離し」たところから始まるものとして、その読みがほぼ全員が読み取れているものである。

ただし、小道具としての役割を果たす「面皷」の解釈が両極され、二分化されるところには、そのままこの作品の混沌たる善悪という主題に繋がる問題でもある。肯定的な意見では、それは規範としての善の念——青年にある正義感と羞恥心を意味するものとして把握され、否定的な意見では、人間の性である「悪」という原罪の原理まで想像を働かせたのである。この部分の指導には、まさに作家の創作意図にある人間認識のあり方及び異文化理解とは切り離して考えられないものである。しかし、それを問題視し、論議する以前に、筆者がまず試みたのは他者である老婆の存在とその生存原理である「仕方がない事」というキーワードに注目させ、学習者に他者から来る「他者指向」という問題意識を促してみたのである。

2.3 他者である老婆の存在——「どうせ唯の者ではない」

以下は下人が羅生門の楼の上へ出る。階段を登って行く場面である。

＜幅の広い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。楼の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頬をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皷のある頬である。下人は、始めから、この上にある者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段を上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其処此処と、動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蛛蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。（略）下人の眼は、その時、はじめて、其の死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆であ

る。(略)下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時に呼吸をするにさへ忘れてゐた。旧記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。>

学習者にこの「どうせ唯の者ではない」という老婆の最初の印象に注意して、中訳と原文の間の表現の相違を指摘してもらった。そして、「どうせ唯の者ではない」という老婆の最初の印象には明らかに学習者の所見が大きな誤読が見られた。まず、肯定的な意味として捉えられた老婆像は「大したものにながいない」「きっと度胸が大きい者だろう」「その気味悪い所に行って、絶対ある程度、あるいはある力を持っている物の筈だ」「きっとたいした人だろう。きっとすごく勇気持っている人だ」。「こんな雨の夜、こんな所にいても怖くないので、唯の者ではないと下人は感じた」「度胸で奇人だと思っている」。そして、否定的な意味として理解される老婆像は「そんな怖い所に来た人はたぶん命知らずの乱暴者なんかならう」「妖怪か悪人か、」「化け物か、魔物に近い「人間」であるはずだ」「妖怪、あるいは犯人など」「普通の良民ではない」といったような見方を取っているのである。

この他者である老婆の形象の特徴把握が間違えられたため、主人公の言動・心理状態の把握まで歪められてしまう可能性があるものと思われる。原文表現のニュアンスの正しい理解を求めるために、この「どうせ唯の者ではない」というキーワードの前文・後文に出てくる老婆の動物的なイメージ描写にその形象性からその意義、ひいては「この雨の夜に、この羅生門の上で」というその場の雰囲気・怪奇性についても、注意を促すべきものである。諸説において、この老婆の形象とその意義について、「猿のやうな老婆」といった意外性・醜怪性の形象性が指摘されている。「この上にある者は、死人ばかりだと高を括つて」一夜の罅を楼上に求めようとしていた下人は、楼上で「この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない」という警戒心をもって、「猫のやうに身をちぢめ

て、息を殺しながら」、急な梯子を這い昇っていくと、「下人の眼は、その時、はじめて、其の死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である」。この場合の老婆の形象性には明らかに老婆の行為への憎悪、正義感の昂進、侮蔑などの下人の心理の展開は、その場の雰囲気、怪奇性や老婆の登場の意外性・醜怪性に触発・増進されたものであり、感覚的反応が下人の善性の発見を促す強力な要因となっていることが注目される¹²。

このような「どう唯の者ではない」老婆という他者の位置付けは、下人の「面砲」と「勇氣」の三段階変化と同様に、作品の中で、いよいよ変貌を遂げていくものである。下人の視座において見た場合、羅生門に相応しい住人として、「「鶏」から「・の赤くなった、肉食鳥」へ、更に「鴉」へと変貌する老婆の形象の比喻には、死の危機に直面した弱者から、弱者を食い尽くす無慈悲な強者へ、更に死骸をさえ犠牲にする生への執着心そのものへの老婆の変貌が暗示されているのであり、羅生門に峙を求めた下人は、そこを究極の生存の場とする老婆の網に取り込まれた犠牲者に外ならないのである。」¹³

3. 主題の把握——「悪」の論理における自他の対比

3.1 老婆の存在——「唯の者」の存在へ

下人における悪の論理はどういうようなものであったのだろうか。その「悪」の逆転性からどういう自我の生の姿勢が考察し得るか、これはむしろこの作品の核心部の問題でもある。このような下人の心機一転の個所をまず引用してみよう。

＜その髪の毛が、一本づゝ抜けるのに従つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ＞

12. 勝倉壽一「『羅生門』——生の摂理——」『芥川竜之介の歴史小説』、1983。

13. 注12に同じ。

消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に対するはげしい憎悪が、少しづつ動いて来た。――いや、この老婆に対すると云つては、語弊があるかも知れない。寧ろ、あらゆる悪に対する反感が、一分毎に強さを増して来たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、飢死をするか盗人になるかと云ふ問題を、改めて持ち出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、飢死を選んだ事であらう。それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかつた。従つて、合理的には、それを善悪の何れに片づけてよいかもしれなかつた。しかし、下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云ふ事が、それ丈で既に許す可からざる悪であつた。勿論、下人は、さつき迄、自分が、盗人になる気でゐた事なぞは、とうに忘れてゐたのである。＞

以上の引用において、下人の心理変化には、最初の恐怖と好奇心から老婆の「仕方がない」という論理を聞いているうちに、いよいよその感情が失望と反感・憎悪の念が強まってくる箇所でもある。ここの下人の心理構造及びその逆転性にはどういう「悪」の定義が認識されているか、検証されるべきものである。ここの老婆の行為に対する「反感」（憎悪の念）及び下人の「悪」の定義はどういう内実のものか、述べてみてもらった。まず、学習者の解答からは「死人の髪の毛を抜くと云ふ事」ということに対して、「羅生門で棄てられ、引き取りのなく、悲惨な終いになった死体にそんな悪いことをするのは、無慈悲の表現だ」、「社会の道德を違反することだ」、「非人間の行為である」、「死体に対して不敬な振る舞い」、「生きている人間はなくなった人に十分に尊敬されていた」、というふうに、一般倫理道德の違反という普遍的な意味として、理解されていることが分かる。ここで、下人にとっては、「死体冒瀆」という「許す可からざる悪」の基準はむしろ漠然としか

意識されていない、という下人の自我像の問題性には学習者にはほぼ読み取れていない段階のものである。結局こうした老婆の悪の論理に失望した下人の心理の逆転性を、「悪」というキーワードの前後の文と、「どうせ唯の者」存在へ変わっていく老婆という他者像の捉え方を分析する指導法を取ったのである。

く「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、鬢にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来た。すると、その気色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持つたなり、墓のつぶやくのやうな声で、口ごもりながら、こんな事を云った。

「成程な、死人の髪を毛を抜くと云ふ事は、何ぼう悪い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにある死人どもは、皆、その位な事を、されてもいゝ人間ばかりだぞよ。(略) わしは、この女のした事が悪いとは思つてゐぬ。せねば、飢死をするのぢやて、仕方なくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も悪いとは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢死をするのぢやて、仕方なくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方わしのする事も大目に見てくれるであろ。」>

なぜ「下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した」のだろうか。下人の期待はどんなものであったろうか。どんな答えを下人は期待していたのか、又作者が用意していたのか、「下人の脆い倫理的道德」、「下人の期待と老婆の裏切り」、「下人の緊張感→失望・侮蔑→憎悪の心理変化」といった三点についてのここでは下人における生の姿勢及び他者認識には、どういう転換の装置を作者が仕掛けたのか、学習者の読みを考察してみた。まず「下人の期待」はどういうものであったのか、学習者の解答からその理解を求めたところ、「く平凡でないもの>、く大した

もの>」、「もっとしょうがない理由だとおもう。例えば、家族の人は病気でお金が必要だからという同情できた理由だ」、「下人はもともと実は盗人にならないで生きる論理で説得されると期待している」、「下人は老婆のした悪は呆れるほどの悪であると、自ら期待している」など、以上の諸意見が出てきた。様々な見解は要するに下人の自己救済・自我解放を目指すところに中心視点に置くのか、それとも他者の裁断へ急ぐ自己の善の論理に基づくべきものか、という下人の自我像の在り方の問題である。このような主観的な読みを克服するために、次は「下人の期待と老婆の裏切り」という自他両者の関係を学習者はどう評価するのか、この物語の「悪」の逆転性からその面白さを考え、説明してもらった。そして、その解答のほとんどは生き延びていけるための、生の摂理としての悪の論理を理解されていることが分かる。こうした主題である老婆という他者の悪の論理への評価においては、学習者の解答から<人間は誰でも、心の中で正義的な部分と悪意的な部分の両方を持ち合わせていると思う。><どうしようもない時にした悪は悪にはならない><老婆はただ弁解だけ、もしみんな悪いことをしたとき、その変な理由で弁解したら、だれも無罪だろう。>といった見解が出されていた。

学習者の価値判断がこうした一見尤もらしい老婆の悪の論理に導かれて、一般論の安易な人間のエゴの問題に思わず頷いてしまっているのである。しかし、下人がただ感覚的な気分によって、老婆のしたたかな生存のための摂理にはまってしまったこの茶番劇の内面においては、実は下人の「飢死をするか盗人になるか」という勇気の欠けた、情緒的な生の姿勢が同時に暴露してくるものである。明らかに老婆の方は、状況によって自らの行為を切り替えられていけるほど、強かな生活者となりきっている。むしろ下人は無自覚のままでいるのである。こうして、自我の生の危機に対して、緊迫感を持ち得ないまま、如何にもやすやすと他者の弱肉強食という酷薄な論理に便乗してしまった下人の主体性の欠乏にはさらに学習者に問題意識を喚起すべき箇所である。このような老婆の「悪」の論理については、むしろそこ

には「暗い生の容認」の形を捉えていることを見逃すことができるまい。老婆はその「仕方がない」という生の論理構造にはもはや「許し」などを求めようとしなかったのである。

3.2 下人の「悪」の逆転性——下人の生の姿勢

髪を抜いて鬢にするという老婆の答えの「存外、平凡なのに失望し」、「同時に、又前の憎悪が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはいつて来」という下人の心理の展開どうを読み取るべきか、という下人の性格の問題性である。下人のこの失望の意味については、川崎寿彦氏の解釈では、「悪は、その不気味な環境が暗示するほどのものではなかった。彼が死を賭した憎むほどのものではなかった。」「彼が失望したのは、虚栄心が裏切られたかもしれぬ。」という見解を示している¹⁴。又、平岡氏の説では、「作者とて、それ以外の答えを用意できていたわけではあるまい。にもかかわらず、そう書き込んだのは、合理的なものではなく、何か異常な、神秘的なものを期待していたのだとするほかはない。」としている¹⁵。しかし、それを下人の人間性の浅薄さとして把握される勝倉壽一氏の説がある。「ここでは、老婆の答えに非常なもの、即ちその行為を導く倫理的な葛藤なり、悪を受忍するに至った苦悩なりを期待する下人の感傷的ヒューマニズムを把握し、老婆の告げようとする酷薄な生の帰結と、生の摂理を理解し得ない下人の人間性の浅薄さを顕示せしめていることを読み取る必要がある。」¹⁶

果たして他者へ働きかける下人の「失望した」生の姿勢にはどういう人間像が読み取られるだろうか。下人の反射的な感情変化は他者中心の論理に引きずられる生の悲哀を学習者はどれほど作者の創作意図が汲み取られていたのだろうか。このよ

14. 川崎寿彦氏著『分析批評入門』、至文堂、1968。

15. 平岡敏夫『現代国語 I 改訂版・学習指導の研究』、筑摩書房、1982。

16. 注 12 に同じ。

うな自他の対照という視点から作品の面白さについて、検討してもらったのである。

本文批評に即していえば、「人間の性である原罪」、「他者中心の過度の配慮」、その背景となる場所・時代から来る個の悲哀」、といった三つの意見が出た。しかも順を追って後者の回答をする数が減っていくものだから、つまり他者指向の行動原理どころか、個の生を支配する場所としての時代性さえ学習者には理解困難なものであったことが分かる。又、それをどうやって、更に作家芥川竜之介の思想問題と関連づけて、「他者中心」の抑制体制からの人間解放を目指している作品一篇の主題に接点していくかは、やはり教師の指導のもとで、参考文献の賛否両論を含めて、芥川竜之介の他の作品の「生の苦悩」という課題で、提示すべきものであった。

3.3 結びの問題性——「下人の行方は、誰も知らない」

前述のように、いよいよ老婆の強者の風貌を持った強かな生の論理にすっかり嵌られた下人の浅薄な生の姿勢が明白になってくるのである。この下人の自我の欠陥性が問われる段階に迫ってくるところへ、次は結びのところで、下人の行方のあり方に問題意識を据えてもらうことにした。

く暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな声を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。下人の行方は、誰も知らない。＞

ここの結びの部分の描写を中訳と比較対照してから、その直訳か意識の問題性を取上げ、自分の感想をも含めて、述べてみてもらった。それで、「下人は盗人にな

るという悪いことを決めた。それに、彼は暗い深淵に向った」、「善と悪は立場が違うと、どちらにはっきり帰着できない。「下人の行方は、たれも知らない。」という結びは善悪は相関的であって、よじれるように交わって存在する」、「盗人になるかどうか、芥川は明確の答えを言い出さない」、「芥川自分が『羅生門』で自分の気持ちを晴らす。自分を放逐、この苦しみに満ちた世界を離れ、解脱する」、「下人は最後に以前の自分と同じような盗人に殺されてしまった。それは因果応報のせいだろうか」などの見解があった。その見方は「＜悪・強盗＞への転落」という崩壊、暗闇な結果、または無に帰する曖昧な生の終焉の「混沌たる善悪の生の構造」、「作家芥川自身の虚無的な挫折」、「発狂か因果応報の報いを受け、死の運命が訪れる」という二つの考えの枠に嵌まっている。この結びの部分の描写に対する学習者の感想を勿論創作意図及び作家論に結びつけて考えさせるために設定された質問である。

作家像との関連性を考える場合は、この問題は真っ先に提示されなければならないものは作品の「初出・初版」と「定稿」との間の改稿問題であろう。書き直された終末部の描写は以下のような相違が見られるものである。

* 「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。」

（《帝大文学》大正4．11）（初出）

* 「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。」

（《羅生門》所収作品）（初版）

* 「下人の行方は、誰も知らない。」

（《鼻》春陽堂、大正7．7所収作品）（定稿）

初出の下人の「明日」の姿は、すべてを無に帰そうとする「雨を冒して」、「京都の町」へ「強盗」という具体的な態様を生きるために「急」ぐという形に描かれている。そこには消極的・否定的性格は少しもない。

4. 異文化理解の困難点——作品評価の問題

この一篇の趣旨である恋愛の破局によって背負わされた芥川の苦悩と人間認識を、ただ偶然性をもった単一の事件によって、作家の全体像を覆っていくことが凡そ危険であり、妥当ではないはずのものである。確かに弥生との結婚を強硬に反対する養父母、伯母の気持ちに素直に従いながらも、無意識のうちに嵩じていた、芥川の抑えがたい不満とか反抗心が下人の老婆に向ける嫌悪と軽蔑の気持ちから似たような感情が見えてくるのである。

＜当時書いた小説は、『羅生門』と『鼻』との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこだわった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快的小説が書きたかつた。そこでとりあへず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短編を書いた。＞（「別稿」『あの頃の自分の事』）

確かに下人の我執からの解放のドラマは付録の「作品解説」から以下のような執筆動機に関わる作者の言説の一直線に沿って、学習者が以上のような作品評価を行うわけである。だが、下人における他者中心の抑制体制からの人間解放のドラマの図式をここで、他の作品との類似性・関連性を言及すべきものであろう。まずは『仙人』（大正 5.8 第四次「新思潮」）においては、主人公の李小二の心理描写には、「人並みに生きてゆかうと云ふ気さへ、未練未積なく枯らしてしまふ」（上）、「何故生きてゆくのは苦しいか、何故、苦しくとも、生きて行かなければならないのか」という特徴がある。吉田俊彦氏の説では、「消極的な生の姿勢」を取る李小二には、「勇気」の欠乏だけで、躊躇していた情緒的・反射的な自己実現の行動原

理に従う下人と、対照的な自我像が描かれている、という見解を示している。「李小二が生活の苦しみを「不当だとは、思」いながらも運命に屈従していた。彼の老人との出会いには、老人との生活程度を比較し、生活の上で優位である自分が「何となく」「済まないやうな心もち」を抱きながらも、なお「自分の暮らしの苦しさを、わざわざ誇張して話して」おり、「自分の同情の徹し」ていないという反省に立ちながら「老人の窮状をチャステイフアイし」ようと苦慮したりする。李小二の生活姿勢が『他者中心』の配慮に外ならない」「これに対して、『羅生門』の世界で、弱者から強者に転じようとして、己の悪を正当化する老婆の悪の論理は、下人の「自己中心」の生活姿勢を飛躍させる大きな力となっている」。¹⁷

果たして下人が完全に「他者中心」の生活論理に侮蔑の気持ちで笑殺していながら、その「勇気」がつまり老婆の悪の論理への納得によって、生じたものと言えるだろうか。「他者」への日常的な生の論理を振り切って、「雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急」ぐ下人の姿が、その新しい生の姿勢には完全に「他者」の抑制体制から自由解放できたと言えるものだろうか。法律、習慣、道徳といった社会（複数の他者）の拘束から解放した下人は、間違いなく新たな生を獲得したのだろう。だが、彼の新しい「勇気」の獲得の時点においては、老婆の「仕方がない」という生への直観が大きな飛躍の力となっていることを無視することができるまい。前述の通りに、下人の善悪の座標軸が京都の崩壊に伴う既成の価値観の崩壊と同時に喪失していたものである。老婆の出会いが勿論一つの契機を与えられていたものである。勿論彼の新しい勇気の獲得には、そのまま老婆の論理を取り入れたものではない。むしろ老婆の原理を否定した方向にあるものである。だから、結末の「下人の行方は、誰も知らない」と呟く芥川竜之介は、自己の生の原理を常に他者の論理との相対化によってしかできない下人の存在不安を「黒洞々たる」闇の世界へ放

17. 注4に同じ。

逐してしまったような形を取ったわけである。己の生の原質を他者の論理から借り着した下人の生の危機は正にこの一点に関わっていると言えよう。この世で生きていくには「他者配慮」から「自己中心」に生きようとすればするほど、いつしかその「勇気」の獲得には無自覚のままで又にしても他者の論理の一時借用という形を取ってしまう、という自己分裂の危機に晒されているのである。このような「他者中心」の過度の配慮に生きなければならない、という芥川竜之介自身の厳しい批判精神であり、博覧強記して得た世紀末的退廃意識が深く関わっているものと考えられる。

以上のような作品理解——作家における人間認識の意味問題には、最も力を入れなければならないものは、主題の「悪」の捉え方と結末の結び方の理解度の問題である。そこで、最終的に作品全体の評価と作家像の捉え方に関して、三つの設問によって、その問題意識の要所を解きほぐしてみたのである。以下の①から③までの設問の中から特に（？）で提示されている要点を参考にして、二者択一の形で、自分にとって理解しにくい問題点を取上げて、その理由について述べてみてもらった。下人の「自我」と老婆という「他者」の両者のその「生の姿勢」への視点の検討である。人間認識の意味として、「善」と「悪」の混沌した物語の世界を、その価値判断と選択の問題でもある。「悪」の世界への飛び込みは老婆の論理をうまく利用し、逆転した下人の生の解放と見るべきか、それとも下人自身の原罪・性である「悪」の本質性のものか、引いてはこうした自他同質の「生存」に付随した二元矛盾というべきものだろうか。なお、こうした自他の「生の悲哀」の内実において、どういう相違を抉り出すべきものか、という深刻な舞台（場所としての社会）観照の問題にも繋がっていくものでもある。自他の内部に掘り下げていったところで、自他の間にほぼ意識されない偽善性と憐れみの情の可能性をも作家の創作意図の妥当性と合わせて、同時に考えてもらうものである。

①【人間認識の意味問題——「善」と「悪」との混沌】

(?) A. 下人の方が偽善者の「悪」であり、責められるべきである。→16人

(?) B. 老婆の方が「悪」であり、下人に圧迫されても仕方のない事である。

→13人

(?) C. 両者は共に哀れな人間の生の表現である。→19人

解答から見た限りでは、どの説を取っても、下人の自我における短絡的な思考、及びその善悪の判断から見られる積極的な姿勢の欠如、及び主人公の自我の覚醒に秘められた他者指向の問題性がほぼ正確に把握されている。又、そうした下人の善悪判断には老婆の生死に関わる緊迫性が見られなかったことも、生存の摂理における自他両者の生の実相もより一層その異質性が読み取られたことが分かる。そうすると、その雑多な意見の中で、これまで朦朧としていた自他の置かれた社会という場所の意味問題が徐々に意識されるようになってくる。この段階において、題名の「羅生門」という舞台（場所）の意味を二説を取上げ、作家認識にある「魔物」と「死」の意味としての世界の性格・生への開眼という問題まで触れて言及していく。

②【「羅生門」という舞台（場所）の意味問題】

(?) 非日常的な「魔物」の世界→30人

(?) 非日常的な「死」の世界→24人

「羅生門」において見られる世界の性格というものは、「虚無」ということをいうのであれば、下人の「自我」の具体的な態様への「覚醒」は非日常的な魔物の世界において始めてそれが明らかな現実味をもって展開されていくものである。そうすると、下人の自我の覚醒にはそうした他者指向の茶番じみた性格の内面に、「死」の世界に追い込まれた無自覚の生の開眼であり、又同時にそれは下人の救済の失敗を同時にもの語っているのである。そこで、最後に全体的に下人の生の姿勢とその行動論理の獲得には、「他者」の介入の必要性があったかどうか、論点の具

体的な結論として自我の偽善性に関して要約してもらうことにした。

③【下人の性格問題、下人の心理変化（勇気の解釈問題）の不可解】

（？）下人は「他者」の論理からヒントを得て、「悪」を犯した。→28人

（？）下人はもともと老婆に出会わなくても最後には必ず盗人になるに違いない

ものである。何も「他者」の介入が必要としなかったのである。→23人

様々な見解に見られるように、他者指向の自我の偽善性に関して、ほぼ全員が一致しているところである。他者の論理によって、生まれた勇気が結局お互いに欺瞞の心情で塗りつけられた世界の実相であり、善悪は結局相対的なものでしかない。この世紀末の虚無的な世界は相互にはもはや許しなどは求めようとはしないエゴの相互理解の構造をなしたものである。無論、老婆の出現はある勇気の契機を与えたにもかかわらず、その混沌たる善悪判断の中においては、ひたすら自我の虚妄の虚偽性を暴いてしまっただけのものである。

5. 結びに

ここまで述べてきたように、指導方法としては、まず「キーワードの把握」によって、例えば場所の象徴的意義——「暮れ方」「蟋蟀」「鴉」、又は主人公の性格及び心理の把握——「面皷」「勇氣」、などをその第一歩の導入の作業として施したのである。その次は主題の把握——「悪」の論理における自他の対照に中心視点として問題意識を据えたところ、他者である老婆の存在の変化——「唯の者」の存在へ展開して、その結果下人の「悪」の逆転性から下人の生の姿勢に迫っていき、いよいよ作家像へ結びついて集約されていく。つまり、「下人の行方は、誰も知らない」という結び方の問題性を考えさせるところまで、辿り付く。なお、異文化理解の困難点として、「自他の対照にある善悪の主題」と「作家像の把握」以外に、

「難解の語彙表現」に関しては、中国語による翻訳文に補助教材として運用してみた。そして、指導の場合は以下の四点で特に注意を払うことにした。

- ①キーワードの意味解釈には誤った読みがされているかどうか。
- ②主題との関連性まで思考されているかどうか。
- ③他説の評との対照比較を促すこと。
- ④翻訳文と合わせて、その異同と誤訳・不自然訳のあるなしで、より正しい言葉の把握へ導いていく。

だが、一方においては、文学教育にはそれなりの読解能力が必要としているものである。以上の学習者の説明と意見には、かなり誤りの表現も多く現れていたことは否定できない。これにはやはり指導の上で、些か困難を来たしていることも無視できないものである。その上、石田敏子氏の指摘にあるように、作品の読みに際して、学習者が特に困難に感じるのは、「文化的事項を欠く事項」と「思考方法、発想の相違」といった文化的障害による種類のものである¹⁸。

そこで、いかにして、作品の中の繰り返して読みを重ねているうちに、目に焼きついてどうしても浮かび上がってくるある特定の表現（主題のキーワードや登場人物の性格と言動の把握や結びの救済の問題性に関わるような肝心な言葉）の発見を促していくべきか、という「問題意識」の喚起をすることが肝心な指導方法となるだろう。そういう方法によって、より普遍的な人間認識が深まっていくばかりではなく、自然に同時に異文化理解にも繋がっていき、更に上述のような誤りの表現の解消にも役に立つものだと、筆者は固く信じる。

18. 石田敏子「読解の指導」『日本語教授法』、大修館書店、1988。

参考文献

1. 石田敏子「読解の指導」『日本語教授法』、大修館書店、1988。
2. 石割透『芥川竜之介』、有精堂、1985。
3. 今野哲「『羅生門』論——生を希求するかたち——」『二松』、1991。
4. 宇野浩二『芥川竜之介（その十二）』、文学界、1952。
5. 海老井英次「『羅生門』——〈自我〉覚醒のドラマ」『芥川竜之介論考——自我覚醒から解体へ——』、1988。
6. 勝倉壽一「『羅生門』——生の摂理——」『芥川竜之介の歴史小説』、1983。
7. 川崎寿彦『分析批評入門』、至文堂、1967。
8. 川崎寿彦氏著『分析批評入門』、至文堂、1968。
9. 小堀桂一郎「芥川竜之介の出発——『羅生門』忖考」『批評』、昭和 43；後『日本文学研究資料叢書 芥川竜之介』、1970。
10. 寺村滋「『羅生門』の精神分析的解釈」『滋賀大学 国語国文学』、1956。
11. 長野嘗一「羅生門」『古典と近代作家——芥川竜之介』、1967。
12. 平岡敏夫『現代国語 I 改訂版・学習指導の研究』、筑摩書房、1982。
13. 宮崎典男『文学作品の読み方指導』、むぎ書房、1980。
14. 三好行雄氏「無明の闇——『羅生門』の世界」『芥川竜之介論』、筑摩書房、1976。
15. 森常治「芥川竜之介の『羅生門』」『解釈と鑑賞』、1965。
16. 吉田精一注『近代文学注釈大系芥川竜之介集』、有精堂、1963。
17. 吉田俊彦「『羅生門』の地上的、動物的イメージと我執の解放」『芥川竜之介——《偷盗》への道』、桜楓社、1987。